

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：14303

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884024

研究課題名(和文) ジュディット・ゴーチエの日本関連作品研究 全体像と小説『篡奪者』の生成過程の解明

研究課題名(英文) Study of Judith Gautier's literary works on Japan : Elucidation of the overall picture and creation process of the novel Usurper

研究代表者

吉川 順子 (Yoshikawa, Junko)

京都工芸繊維大学・その他部局等・准教授

研究者番号：90732032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)： ジュディット・ゴーチエは19世紀後半から20世紀初頭に文学作品を通してフランスに日本文化を伝えた作家である。本研究はその日本関連作品の全体像を構築し、第一作小説『篡奪者』の生成過程の解明を進めた。その結果、日本に関連する行事に触発された執筆、日本の神話や文学への関心、同時代的な問題の投影、身近な資料の駆使といった特徴を見出すことができた。これにより、各作品の源泉調査および時代背景との関連性の考察を行っていくための基盤が作られた。

研究成果の概要(英文)： Writer Judith Gautier introduced Japanese culture to France through her literary works spanning the latter half of the nineteenth century to the early twentieth century. This study constructed an overall picture of her works on Japan, and advanced the understanding of the creation process of her first novel Usurper. We found her works are characterized by the writings inspired by events concerning Japan, an interest in Japanese mythology and literature, a reflection of period problems, and the use of readily obtainable documents. This study built a foundation for researching the sources of her works and considering their relationship with the historical background.

研究分野：フランス文学

キーワード：ジャポニスム 日仏文化交流史 ジュディット・ゴーチエ 十九世紀フランス文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 当該分野における先行研究

ジュディット・ゴーチエ(1845-1917)は、ヨーロッパに日本の文物が急速にもたらされた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、日本を主題にした文学作品(小説、戯曲、エッセイ、詩の翻訳)を多数著したフランスの作家である。日本の伝統文化や歴史をヨーロッパの一般大衆に知らしめた先駆であり、ジャポニスムの流行に文学の分野から貢献した。当時、どのような手段で、どのような時代背景のもと、どのように日本文化理解が深められたかをテキストに依拠して解明できる事例であり、日仏文化交流史の研究として、本作家の日本関連作品の全体像および生成過程を詳らかにする意義がある。

しかし、その作品に関する本格的な研究は、中国関連作品を扱ったYvan Daniel氏の研究以外に存在しない。日本関連作品についても、短篇小说「神功皇后」に関する金沢公子氏の論文「ジュディット・ゴーチエの『ジン・グウ皇后』: 神功皇后の新羅征討物語のフランスにおける変容」(『教養論集』、1990)、戯曲『微笑みを売る女』に関する青木博子氏の論文「『微笑みを売る女』とジャポニスム」(日本フランス語フランス文学会誌、仏語論文、2004)があるのみで、その全体像も不明であり、体系的な研究もない状態であった。

(2) 私のこれまでの研究

そのなかで私は、特に作家が逆説的ながら最も自由な文筆活動と考えていた極東詩の翻訳に、極東文化に対する見解が鮮明に表れているのではないかと推測した。また、当時のヨーロッパ文化も論評していた点に着目し、西洋文化が極東文化を受け入れたメカニズムを導き出せると判断した。そして、和歌翻訳集『蜻蛉集』(1885)を中心に、中国詩翻訳集『白玉詩書』(1867)、両作品と関連性のある芸術批評や詩を研究し、その成果を『詩のジャポニスム ジュディット・ゴーチエの自然と人間』(京都大学学術出版会、2012)として発表した。

ここで明らかにしたのは、本作家の極東詩の翻訳には創作的側面があり、訳詩に見られる日本の自然観への賛美は、作家が当時のヨーロッパ文化(バルビゾン派の絵画やワーグナーの楽劇等)を通して深めた自然と人間に関する考察の反映であったということである。

こうした《省察と共感の異文化受容》が導き出されたことで、文学におけるジャポニスムを単なる《異国趣味》や《賛美と優越のアマルガム》といった視点でとらえてきた既存の発想を転換する必要性を認識し、文学作品で日本が俎上に載せられた意義を同時代の動向に照らしてさらに追究するため、本作家の日本関連作品を総合的に研究すべきであると考えに至った。

2. 研究の目的

上記のような背景を踏まえて、2014年から2016年までの2年間にわたる本研究では、次の二つの作業を行うこととした。

《研究1》日本関連全8作品の制作経緯の調査と全体像の構築

《研究2》第一作小説『篡奪者』(1875)の生成過程の解明

すなわち、今後数年かけて深化させていくジュディット・ゴーチエの日本関連作品に関する総合的研究の基盤を築く段階にあたる。

その総合的研究の目的は、次の二点にある。

日本の歴史や文化や文学に対する当時のヨーロッパの人々の反応の解明

その反応とヨーロッパの歴史的・文化的・文学的背景との関連性の追究

そして、本研究に始まる一連の研究を完成させることで、本国でも未開拓の分野に日本人研究者の立場から最新の研究成果をもたらすこと、日仏文化交流の豊かな歴史を伝え継承していくこと、過去の事例の研究成果を現代の異文化交流における問題解決の手掛かりとして提示することを目指している。

3. 研究の方法

本作家の日本を題材とした作品のうち、書籍として出版されたものは、長篇小説が2篇、短篇小说が5篇、戯曲が1篇ある。

1. 長編小説『篡奪者』(1875)
2. 短篇小说「花咲く葦の旅籠屋」(1882)
3. 戯曲『微笑みを売る女商人』(1888)
4. 短篇小说「姫君十六の年」(1893)
5. 短篇小说「小町」(1893)
6. 短篇小说「神功」(1898)
7. 長編小説『愛の姫君たち』(1900)
8. 短篇小说「ヤマタの結婚」(1912)

(1)《研究1》日本関連全8作品の制作経緯の調査と全体像の構築では、各作品の基本情報となる以下の三点を調査し、それらを踏まえて、本作家の日本関連作品の全体像を構築する。

A「執筆背景」: 構想や執筆の時期、着想のきっかけ、源泉となった史実や文献

B「出版状況」: 出版社の方針、当時の評価、改訂版の有無

C「主題」: 主題の概要、作品間における主題の関連性

これにより、今後の個別の作品研究を、全体における位置づけや手法・主題の傾向を認識したうえで行えるようにする。

(2)《研究2》第一作小説『篡奪者』(1875)の生成過程の解明では、以下の三点を調査し、作品の生成過程を明らかにする。

イ「源泉となった文献の特定」: 主題や固有名詞の表記等から、参照文献を割り出す

ロ「文献に基づく部分と虚構部分の分

析」：史実や文化に関する記述から、作家が日本のいかなる側面に興味を持ったのか、また、虚構部分を日本という舞台に置くことでいかなる効果を生み出したのかを分析する

八「同時期の問題意識との関連性の分析」：項目口の分析から導き出されたテキストの特徴と、同時期の問題意識との関連性を考察する

これにより、作家が日本のいかなる側面を共鳴的(もしくは批判的)にとりあげたのか、また、作品が同時代の関心や思想からいかに影響を受けながら生成されたのかを明らかにする。

また、個別作品研究の第一弾であるこの《研究2》を通して、以後に続ける作品研究のために有効な方法や念頭に置くべき注意点を探る。

4. 研究成果

(1) ジュディット・ゴーチエの日本関連著作の全体像の構築

前述の通り、本作家の日本関連作品として全8作品を対象に研究を行う予定であったが、調査を進めるなかで、出版物になる前に新聞等に掲載されたプレオリジナルが多いこと、一つの作品を発展的に書き換えたものが存在すること、日本に関するエッセーや日本の詩の翻訳も上記作品と相互に関連していることがわかったため、日本関連「作品」のみならず「著作」の全体像を明らかにする必要性が生じた。そこで、可能な限り日本関連著作を収集し(未発見だったものも含む)、その初出・媒体・改訂版の有無・相互の関連性を調べた。以下がその結果である。

これにはフランスで出版されているジュディット・ゴーチエ全集(Yvan Daniel 編、Classiques Garnier 社、2011-)でも明らかにされていない文献が含まれ、文学におけるジャポニスムの研究の貴重な資料体となる。

[ジュディット・ゴーチエの日本関連著作]

は再録・再版。太字は創作。記事やエッセーが収録された書名・新聞名は省略した。

1867 エッセー「万博報告、中国・日本・タイ、続編」：中国人と日本人の精神・習慣の違いを紹介

1867 エッセー「万博報告、中国・日本・タイ、続編」：美術品、家屋、衣装を紹介

1867 エッセー「万博報告、中国・日本・タイ、続編」：家屋の内装や家具、暮らしを紹介

1875 長篇小説「篡奪者」：大坂の陣で徳川家康から豊臣秀頼を守ろうとする架空の主人公・長門守の戦いと友情と愛の物語

1878 エッセー「一八七八年の万博、日本」：万博の日本館より漆器、漆絵、太田万吉による家具の展示会等を紹介

1878 エッセー「一八七八年の万博、日本、続編」：万博の日本館より深川栄左衛門によ

る有田焼の展示会、七宝、屏風等を紹介
1879 エッセー「養蚕秘録」：上垣守国『養蚕秘録』(1803)の紹介

1882 短篇小説「花咲く葦の宿」：江戸の青年と郊外の宿の娘の悲しい結婚の話

1883 エッセー「日本美術回顧展」：ルイ・ゴンスによる展覧会の報告

1883 エッセー「日本美術回顧展」：展覧会の報告の続編、1875年の『篡奪者』から小野小町に関する記述を抜粋

1885 和歌翻訳集「蜻蛉集」：八代集を中心に和歌を訳出、『古今集』『仮名序』を抄訳

1887 長篇小説「太陽の巫女」：1875年の『篡奪者』の改訂版

1888 戯曲「微笑みを売る女」：身請けされた遊女の裏切りと因果応報を描き、日本の法律や女性の地位に疑問を投げかけたもの

1889 曲「春雨、日本の古い歌」：曲の譜面起こし

1889 歌「日本で有名な田舎の音楽」：曲の譜面起こし、日本語歌詞のローマ字転記、歌詞のフランス語訳

1889 曲「米の神の祭り、日本の行進」：曲の譜面起こし

1892 エッセー「東京」：東京の歴史、名所、風習、文化等を三〇頁ほどにまとめたもの

1892 エッセー「日本の犯罪」：1892年、大分県の河野儀平が母の病気を治すため妻の生肝を取り出して殺害した事件を紹介

1893 短篇小説「小町」：世を捨てた小野小町が在原業平に思いを寄せられ続けるも、根気試しに耐えた少将への信頼を語る話

1893 短篇小説「姫君十六の年」：春を欲する姫君のために人工的に春を作り出した話

1894 短篇小説「吉原の生きた花々」：1900年の『愛の姫君たち』のプレオリジナル

1898 短篇小説「神功」：神功皇后と武内宿禰による新羅征討を脚色して物語化

1898 エッセー「日本の犯罪」：1892年の「日本の犯罪」を再録

1898 エッセー「東京」：1892年の『東京』を再録

1900 長篇小説「愛の姫君たち」：自由民権運動下の青年と吉原の花魁の物語

1900 戯曲翻訳「芸者と侍」：川上音次郎と貞奴の一座が上演した二幕物戯曲の翻訳

1900 戯曲要約「袈裟」：遠藤盛遠に思いを寄せられた袈裟御前が家族を守るために自己犠牲を払ったとする戯曲の要約

1900 歌「鐘の奉獻(能)」：曲の譜面起こしと歌詞のフランス語訳

1900 曲「手毬(毬踊り)」：曲の譜面起こし

1900 曲「花笠(花笠踊り)」：曲の譜面起こし

1900 曲「かっこう(太鼓踊り)」：曲の譜面起こし

1900 曲「越後獅子(貞奴による琴)」：曲の譜面起こし

1900 散文詩「花鳥は羽を整える」「花鳥は物語を語る」：花魁を主題にした散文詩

1904 **短篇小説「神功皇后」**: 1898年の「神功」を再録
1904 **短篇小説「天の機織り娘」**: 1875年の『纂奪者』第五章に挿入されていた劇中劇を単独で再録
1904 **短篇小説「姫君十六の年」**: 1893年の「姫君十六の年」を再録
1906 **エッセー「日本公使館での茶会」**: パリの日本公使館でフランス公使本野一郎によって開かれた茶会の様子を報告
1911 **戯曲「花咲く園」**: 2月にミッセル劇場で上演された日本物戯曲、内容は不明
1912 **エッセー「起源」**: 徐福が始皇帝のために不老不死の薬を得に行く名目で人々と東に赴き、戻らなかったとする司馬遷『史記』の記述を日本の起源の一つと説明
1912 **エッセー「歴史」**: 六世紀から明治維新に至る日本の政治体制を素描
1912 **エッセー「名前」**: 日本の国名の変遷を説明、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「東京」**: 歴史、風土、近代化を素描、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「富士山」**: その起源や日本人にとっての富士山を紹介、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「寺社」**: 浅草寺の紹介、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「様々な類型」**: 中国・韓国系、純日本系の特徴を説明、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「昔の衣服」**: 浅草の蟬人形館より日本人の衣装や髪型、装飾品を紹介、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「日本の時間」**: 十二時辰の説明、1892年の『東京』とほぼ一致
1912 **エッセー「体力」**: 回向院相撲を紹介、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「法律」**: 1892年の「日本の犯罪」を再録
1912 **エッセー「祭」**: 年中行事の素描、1882年の「花咲く葦の宿」の描写と一部一致
1912 **エッセー「庭園」**: 庭園の特徴と生け花を紹介、1892年の『東京』と一部類似
1912 **エッセー「芸術」**: 室町通りの骨董店より青銅、漆、象牙、磁器等を紹介
1912 **エッセー「漆器の製造」**: 漆器の製造方法を解説、1878年の「一八七八年の万博、日本」より抜粋
1912 **エッセー「茶道」**: 1906年の「日本公使館での茶会」を再録
1912 **エッセー「帝の吹上御苑での宴」**: 明治天皇、皇后、皇太子嘉仁親王（大正天皇）などが出席した一月十日の歌会始の報告、および、武士道、皇室への忠誠心を説明
1912 **エッセー「春の丘」**: 赤穂事件と四十七士の墓がある泉岳寺の紹介
1912 **短篇小説「ヤマタの結婚」**: 1882年の「花咲く葦の宿」に加筆して再録
1919 **エッセー「帝の吹上御苑での宴」**: 1912年の「帝の吹上御所での宴」を再録

1919 **エッセー「日本公使館での茶会」**: 1906年の「日本公使館での茶会」を再録
1919 **戯曲翻訳「芸者と侍」**: 1900年の「芸者と侍」を再録

以上のように日本関連著作の全体像を構築したことで、次の特徴を確認できた。

背景 日本関連著作は1910年代まで出版されたが、その大半は1860年代半ばから90年代までに構想されたものである。これは、1867年のパリ万博から、78年のパリ万博を経て、1900年のパリ万博に至る、ジャポニスムが隆盛を極めた時期に一致する。本作家は1889年を含め同市で開催された四回の万博を取材しており、こうした行事に際して見聞きした、分野を問わない日本文化に関心をかきたてられて調査・執筆した著作が多かったと考えられる。自身が経験した事や日本から入った同時期の報道も取り上げている。つまり、著作に一貫性がなかったり一見唐突に思われる主題があったりするのは、時代や状況と足並みを合わせつつ執筆を行ったからで、そうした本作家の著作を通して、当時の一般市民が見ていた日本文化や彼らの関心の傾向を描き出すことができる。

主題 上で述べた執筆の背景からもわかる通り、本作家が扱った主題は以下の例のように多岐に亘る。内容も詳細で、当時の日本関連書籍等に基づいたことは確かである。「神話と歴史」: 国生み、新羅征討、キリシタン迫害、大坂の陣、武家社会、明治維新
「伝統文化」: 美術工芸、着物、養蚕、茶の湯、生け花、日本家屋
「社会と風俗」: 神道、祭り、自害、刑罰、吉原遊郭、江戸や関西の地域文化
「文学」: 和歌、昔話、大衆歌謡、七小町など謡曲、歌舞伎、芝居

なかでも、人気の高い美術工芸のみならず、神話や文学にも紙面が割かれた点が興味深い。日本の精神を教えてくれるのは文学（特に詩歌）であるとビュルティを始め当時の日本学者は認識していたが、主に専門書で紹介されていた神話や文学を、エッセーや小説の形で一般市民に普及させた本作家の功績は大きい。時を経て再録・抜粋されていることから、読者の関心も高かったと思われる。

視点 本作家は日本学者と違い、ある分野の知識を体系的にまとめたり、文献を渉猟して情報を客観的に示したりすることはない。常に「現在の自分」に視点がある。自分が日本文化に対して抱く興味、疑問、共感などを際立たせて作品を創作したり、過去の日本の話を脚色して現代の問題に重ねたりする自由さがある。それゆえ、本作家の日本関連著作は、日本文化を紹介するものであったと共に、当時のヨーロッパ人の日本文化の受け取り方を今に伝えるものにもなっている。

方法 執筆方法の特徴は「使い回し」「ジャンルの横断」が多いことである。使い回しは、和歌の訳詩や歌詞の翻訳（楽譜と共に）を小説に挿入したり、エッセー中の美術品の解説を小説の描写に転用したりしたのがある。ジャンルの横断とは、浮世絵や工芸品、日本関連書籍の挿絵等を見ながら書いたような作中の描写、歌舞伎など舞台作品の劇中劇化、謡曲の物語化、和歌の発想の散文化などである。すなわち、多岐に亘る著作や経験を一般読者の読みやすい文学作品に昇華しており、こうした方法によって作品に面白さや臨場感が生まれ、日本の文学や精神をわかりやすく理解できたりする。その方法を具体的に分析することで、有効な異文化受容の形を導き出すこともできるだろう。

（２）ジュディット・ゴーチエ略年譜の作成

上記（１）の研究成果を踏まえ、まだフランス本国にも存在しない本作家の略年譜を作成し、現在、「ゴーチエの会」（金沢公子成城大学名誉教授主催）においてメンバーと共に推敲中である。紙面の都合上ここでは省略。

（３）第一作小説『篡奪者』の生成過程の解明

ジュディット・ゴーチエが1875年に初めての日本物として出版した『篡奪者』は、全二巻、三一章からなる長篇小説である。「日本の歴史の挿話(1615)」という副題の通り、大坂の陣が舞台で、豊臣秀吉亡き後の秀頼を徳川家康から守る架空の人物・長門守を主役とした、戦いと友情と愛の物語である。

本研究では、「源泉となった文献の特定」「口「文献に基づく部分と虚構部分の分析」」「同時期の問題意識との関連性の分析」を行う予定であったが、本作品で扱われた日本文化が神話から庶民の風俗に至るまで多種多様であったこと、当時存在した日本関連書籍が多数にのぼったこと、前述の通り、本作家はテキストを使い回すことが多く、著作全体を踏まえて個別作品を分析する必要があったことから、上記（１）の日本関連著作の全体像の構築をより完成度の高いものとするを優先し、（３）はイの調査を中心とした限定的なものとなった。

全篇の日本語翻訳、当時入手できたと考えられる日本関連書籍約五十冊の収集、作品で取り上げられた日本文化約三十項目の抽出のほか、明らかにできたものは以下の通りである。今回調査が及ばなかった点も、今後の研究で継続して調べていく。

【『篡奪者』の源泉となった文献】

大坂の陣は禁教令直後の内乱であることから宣教師文書に記録が多いほか、同時代のレオン・パジェス『日本キリスト教史』（1869）や日本学者レオン・ド・ロニーの歴史関連著作が着想源になった可能性が指摘されていた（Yvan Daniel 編『全集』）。しかし、私が

これまでに行った研究から考えると、本作家がそうした専門書を繙くことは少ない。

この推測をもとに、19世紀初頭から1875年に至るまでに出版されたより一般的な日本関連書籍を調べた結果、エメ・アンペール『幕末日本図絵』（1870）が参照されたことがわかった。固有名詞の綴り、語彙や表現の一致、『篡奪者』における描写と『幕末日本図絵』の挿絵の一致から、確定できるものである。同書は、1863年に修好通商条約調印のため来日したスイスの特使である著者が、滞在中に見聞きしたことを画家によるふんだんな挿絵と共に紹介したもので、『篡奪者』の五年前に出版された。ジュディット・ゴーチエはこのベストセラーを細部（挿絵も含む）に至るまで読み込んでいたことがわかる。

しかし、『篡奪者』には同書だけでは得られない情報が織り込まれているので、他の日本関連書籍も参照されたはずである。例えば、フレシネ『現代の日本』（1857）、パリ『日本の首都、京都散策』（1869）、ジークフリート『十六か月世界一周』（1869）、デュレ『アジアへの旅』（1874）などを参照した可能性もあると考えている。

【同時期の問題意識との関連性】

先述の通り、これまでの研究で、本作家の極東文化受容が同時代のヨーロッパ文化を通して深めた問題意識の延長線上にあることを示した。『篡奪者』が出版された頃、本作家は「英米人は日本人の異様な奇妙さに特に関心があるようだが、私は日本人の性質の悲しくて重々しい側面に関心を持つとした」と述べたことが記録されているが（リチャードソン『ジュディット・ゴーチエ』）、この発言は何を意味するのだろうか。

『篡奪者』とは、秀頼から権力を奪った家康のことである。当時の日本関連書籍では、家康はよく「篡奪者」と呼ばれている。しかし、本作品の主役は、自らの命を犠牲にして大坂城から秀頼を逃がす架空の長門守であり（史実では秀頼はそこで死んだとされているが、実際に秀頼生存説というものもあった）、家康は悪役として描かれている。本作品の主題は秀頼に対する長門守の忠誠心と自己犠牲であると思われるが、なぜ「篡奪」のほうにタイトルがつけられたのだろうか。

1875年に「篡奪」が取り上げられたことは、その五年前の1870～71年に起きた普仏戦争を思い出させる。実際、大坂城が家康軍に取り囲まれて終焉を迎える大坂の陣はフランス語でle Siège d'Osakaと訳され、同じく、プロイセンによるパリ包囲もle Siège de Parisである。ワーグナーに会うためミュンヘンを訪れていたジュディット・ゴーチエは、普仏戦争勃発の報を聞き、急いでパリに戻っており、この歴史的事件を目の当たりにしていた。

一方、「長門守」という主人公の役職名も、もう一つの戦いを想起させる。当時の日本関連書籍ではNagatoという固有名詞を比較的

よく目にする。それは、1863～64年に起きた下関戦争である。長州藩が攘夷の目的で単独で英仏蘭米に挑んだ。長州藩とはすなわち周防国と長門国のことであり、この歴史的事実を説明するにあたって、Nagato の語が頻繁に使われた。アンペール『幕末日本図絵』によると、長門守は「好戦的で、喧嘩腰の大名」として知られていたようであるが、『篡奪者』の長門守も絶大な力を持つ家康に果敢に立ち向かった。

このように本作家の第一作小説『篡奪者』には、様々なレベルで戦争の記憶が刻まれている。ちなみに、本作家の日本人の友人としてエッセーにも登場する光妙寺三郎は、1871年から78年まで、長州藩の留学生としてパリに滞在していた。これらの点をさらに調査していく必要がある。

以上(1)～(3)の研究成果を踏まえた今後の展望は、本作家のすべての日本関連著作で紹介された日本文化に関する情報を整理し、その源泉となった文献を特定、さらに脚色等を分析し、作品と当時の時代背景との関連性を明らかにしていくことである。

伝統文化から現代の我々が省みなくなった文化に至るまで、日本文化がかつてのヨーロッパで想像以上に詳しく紹介されていたことを、その過程も含めて多くの人を知り、自国の文化を回顧し、その価値を再発見していけるよう、引き続き論文等で成果を発表していく。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

吉川 順子、ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』 翻訳にみる恋歌の解釈の差、フランス翻訳学会(SoFT)、2016年3月19日、京都工芸繊維大学(京都府・京都市)

吉川 順子、レオン・ド・ロニー『詩歌撰葉』 「序論」について、フランス翻訳学会(SoFT)、2016年3月19日、京都工芸繊維大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計2件)

吉川 順子 他、早美出版社、フランスと日本 遠くて近い二つの国、2015、308(113-123)

吉川 順子 他、勉誠出版、テキストとイメージを編む 出版文化の日仏交流、2015、352(131-160)

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉川 順子 (YOSHIKAWA, Junko)
京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授
研究者番号： 90732032